

北の鉄道風景

Train number; 33D

2023.1.22 12:40

1/40, f/20, ISO 64, f=31mm, Daylight/Sunny

5504×8256 Raw

第117回

他所の風

幼い頃、知らない人がやって来て、親たちが、どうぞどうぞと家に入れ、仰々しく挨拶を交わし、手土産などが差し出され、いつになくかしこまった雰囲気の数になるということがあった。その人物は、自分たちが日常交わしている言葉とは違った喋り方をし、身のこなしも大概は垢抜けていて、周囲も普段とは違った態度であるのが不可解だった。

会話の最初は「今日は、何時に発つたんですか」といったもので、夕方の

来客でも、大概是朝早く出たという答えだった。そして決まって列車は混んでいたが、なんとか座れたという言葉が続いた。私は満員の急行列車が頭の中を走り回るのを感じ、それだけでいい気分になり、そのまま大人の会話を聞くことになる。退屈になっても我慢して聞いていると、長い付き合いだったり、世話になった人物だったりする。昔近所に住んでいたが出征し、とつくに死んだと思っていたが生きて帰ってきて、年の節目には必ず挨拶に来るな



知らない町の風に当たるのも面白かった。冷氣は町の活気までも可視化した。
室蘭本線 1975



写真と文＝眞船直樹

どという律儀な人も当時はよくいた。私はそこで大人の世界を垣間見たような気分になり、多少得意であった。

このような文化は、もう日本にはない。他人が家に上がることはほとんどなくなった。大人の会話に子供が同席することもない。家において、身の回りに知らない風が吹くことはなくなった。

あれは何だったのか。知らない人が、突然家庭に割り込んで来たあのころの社会は、野蛮な社会だったのだろうか。私には、ディスプレイを通して自分の机に舞い込んでくる膨大な数の、名を隠した他人の方が不気味だし、それを日常として受け入れている現代社会の方に忌避感^{きひ}をもつ。しかも、ネットの他人は、私という人間が受け入れやすいようなバイアスがかかっていることも怖い。心地いい風も怪しげだ。

年の節目などによく吹いた、あの風に少しでも当ててあげようと、孫たちを外に連れ出す。徒歩か公共輸送機関でなければ、あの風は吹かない。なかでも一番吹きそうな気配を感じるのは鉄道だろうか。